

英語を使って「人とつながり」「世界を知り」 世界のためにできることを「自分事で考える」

生徒が主役の英語の授業について、その舞台裏に迫るべく、脚本や演出を担った先生にスポットを当ててご紹介します。
場づくりの工夫とともに、教材研究の大切さを改めて実感させられた、そんな授業実践をご覧ください。

取材・文／松井大助
撮影／竹内弘真



英語
和田 玲先生

塾講師や非常勤講師を経て、順天中学・高校の教員に。現在は教員対象のさまざまな英語授業研修会で講師も務める。著書に『5STEPアクティブ・リーディング』『論理を読み解く英語リーディング』『世界を読み解く英語リーディング』(いずれもアルク)。

生徒に対する想い

無知は人を傷つける
学ぶことで「優しい人」に

順天中学・高校の和田先生は、生徒には「優しい人になってほしい」そうだ。変化の激しい時代に、牧歌的すぎる目標にも感じる。が、和田先生はいたって本気だ。和田先生の考える「優しさ」とは何か。「多様なものを受け入れることのできる素養を身に付けること。そのうえでいろいろなことを知って、いろいろな想像力を広げて、他者の心に共感したり寄り添ったりすることのできる幅をもつことです。優しさとはそうして鍛えていくもので、単に人当たりが良い、というのを、優しさとは言わないはずです。僕は、『学ぶとは優しさを身に付けることにほかならない』と思っています」

学ぶことをおろそかにすれば、他者の背景にあるものへの理解が欠けて、知らぬ間に相手を傷つけることがある。だから和田先生は、一緒に学んできた生徒には、時宜を見てこんな言葉も投げかける。「無知は人を傷つけるんだ」

その言葉を生徒が軽く聞き流すのではなく、真正面から受け止めて「じゃあ自分は、誰のために、何のために、どんなことを学びたいだろう?」と思考を深めていけるように。和田先生が英語の授業で目指しているのは、生徒のなかにそうした土壌を耕していくことだ。

授業の実践

言葉を使うんだったら
もっと豊かにつながろう

1年生から2年生前半まで、和田先生が授業で重視するのは「POINT」、楽しむことだという。英語を学ぶことを楽しみ、何よりも「英語を使って人と関わり、つながり合うこと」を楽しもう、と。

「誰とでもペアを組めて教師との掛け合いも楽しめて、課題には周囲と助け合って挑もうとする。まずはそんな受容的なクラスカルチャーをつくりたいんです」

授業の始まりはペアでの英会話から。次いで授業の前半は、教科書のテキストを読み解く学習だ。その際の学習も生徒同士の関わり合いを中心に進める。

例えば、教科書の1節を各自が1〜2分で読み、机をつけたペアで、理解した内容や感想をシェア。そのあとで和田先生



ペアでのワークのあと、和田先生が全体に意見や感想を求めると、生徒たちが次々と手を挙げて答えようとする。白い歯をのぞかせて笑顔で挙手しているのが印象的。

が「どんな内容だった?」「どんな意見が出た?」と投げかけ、生徒が手を挙げて答えては、全体で学びを共有するのだ。

取材当日の教科書の題材は「制服に賛成か反対か」。最後に、じゃんけん大会で選ばれた女子生徒が内容のまとめと自分の意見を発表した。彼女は制服に「賛成」。朝は時間がなくて服選びに悩んでいられないし、たくさん服を買うお金もないから、と英語で持論を展開した。

授業の後半は、和田先生が用意した独自のテキストを、これまたペアで助け合って読み込む。まず目を通したのは、妻から30年連れ添った夫への手紙だった。かつて自分に大告白をした不器用な夫に、その出会いと家族が宝物になったと振り返り、「私は今でもあなたの太陽?」と投げかける。エピソード・感じたこと・メッセージがきれいに展開された名文だ。

それを参考に、生徒たちもこの3つの要素を入れた手紙を、ランダムに選ばれた級友に書くことになった。和田先生が



1年生の授業。教科書などの英文読解も、それに対する自分の思いの表現も、生徒同士ペアで助け合っているのが基本。ペアはなるべく異性と組むように意図的に分けるという。



手紙のテキストに、エピソードなら赤、感じたことなら青、メッセージなら緑のマーカーを引いて文章展開への理解を深める。論説文を読むときも同じように論理展開の基本を学ぶ。



3年生の授業。受験対策と世界を知ること兼ねた長文読解が中心となるが、一人で取り組むのではなく、ここでも生徒がペアやクラス全体で助け合って進めるのが基本となる。

「メッセージとは人とつながろうとする意志なんですよ。言葉というものは人とならうとして使うんです。息子は会いたくないはず、だからあえてメッセージは書かない。母の愛なんだよ。でもそんなの切ないよね。もっと豊かにならなりたいじゃないですか、言葉を使うなら。だから、これから友達に書く手紙には豊かなメッセージを入れてほしいんです」

英語を使って世界に目を向け課題への向き合い方も学ぶ

2年生後半から3年生の授業では、関わり合いを楽しみつつ知的な要素も増やす。特に3年生には、受験対策を兼ねながら「英語を使って世界を知る」こともできるよう、計画的に授業を展開する。

3年生の夏前までは、基礎体力をつける期間。語彙や文法の習得、論理展開の理解を進める。ただし単調な学習ではない。例えばかるた取りのような単語復習。生徒がプリントに英単語を散りばめて書

き、和田先生が日本語を読み上げたら、該当する英単語を相手より早く見つけることを競う(54ページ上段写真参照)。

夏からは、和田先生がセレクトした過去の入試問題を使い、世界の課題にふれる。環境問題や飢餓、格差などを題材にした長文を生徒同士で助け合って読むのだ。その際は世界の課題が「自分たちと関係している」と感じさせる工夫も施す。

例えば、絶滅危惧種にふれた長文を読むとき。生徒に今持っているお菓子を机の上に出させ、成分を確認して「君は動物たちの絶滅に加盟しているね」と言い放つ。教室には「何言ってるの、この人」という空気が漂うので、すかさず「どういことか読んでみましょう」と促す。そのうえでtabiat, tabientation(生息地の分断)という語句を掘り下げる。絶滅危惧の要因は、現地にオイルをつくるプラントーションが増えて生息地が分断したこと。そのオイルが菓子にも使われているのだ。和田先生が投げかける。

「この語句がわからなくても試験で満点は取れる。だが、ここがわからなければこの文章を読んだことにはならない」

2学期からは、自分たちと関係する世界のためにできることを模索する。過去問を使って、医療支援や経済支援、教育支援のあり方などを読んで学ぶのだ。

まとめるならば、英語で人とつながり世界を知り、自分にできることを考えるのが、和田先生の授業の骨子だといえる。「英語」を、学び、英語で、育む。両方あるのが自分の目指す英語教育です」

順天中学校・高校(東京・私立)



School Data

普通科/1834年創立
生徒数(2018年度) 737人(男子360人・女子377人)
進路状況(2018年3月実績)
大学227人・その他41人
〒114-0022 東京都北区王子本町1-17-13
TEL 03-3908-2966
URL <https://www.junten.ed.jp/>

Outline

中高一貫校(高校からの入学可)、SGH指定校。教育理念に「英知をもって国際社会で活躍できる人間を育成する」ことを掲げる。進度の早い「選抜クラス」と基礎からじっくりと理解を深める「標準クラス」で生徒の進学をサポート。海外修学旅行や海外留学、留学生受け入れなどを通して、国際教育にも力を入れている。また、多数のボランティア活動の機会を提供することで、福祉教育にも積極的に取り組んでいる。

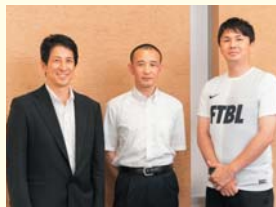
研鑽し合い、悩んだら帰る場所でもある 順天中学校・高校の「授業研究プロジェクト」

和田「堀内先生は僕の恩人で、苦しかった時期から相談に乗っていただいています。その堀内先生と始めたのが授業研究プロジェクトです」

堀内「和田先生は、生徒が主体的に動くにはどんな教材をどう投げかけ、どう展開するか徹底的に研究されていて、教科を越えて参考になります」

和田「堀内先生に相談したときに『学ぶプロセスを丁寧に考えることが大事では?』とアドバイスしてくださったのが大きかったですよ」

小林「僕にとって授業研究プロジェクトは帰る場所です。授業で悩んだときに相談できる場があるから、いろいろ挑戦しよう、と思えます」



堀内「生徒が意欲的になるような授業をしたい、という原点を忘れたくないですね。何年授業をしても、その出来にもう満足した、なんて言えませんから」

左より和田 玲先生、堀内 進先生(理科)、小林光一先生(保健体育)

授業ができるまで

原点は偏差値30から 巻き返した実体験

和田先生は高校生の頃、勉強を全然しなかったそう。毎日テコンドーに夢中だったからで、高校卒業から半年後に世界大会のメダリストになったほど。

けれども、メダリストとはいえ無職無所属だった19歳のときに、大学生になった同級生に引け目を感じたという。

そこで一念発起して大学受験を決意する。当時の英語の偏差値は30。そんな和田先生に、高3のときの担任の先生は



1 教師対生徒のコミュニケーションの場にせず、 みんながお互いの顔を見て表現し合う場に

和田先生は、教師という存在を生徒に「すべての正解をもたらす権威」と思わせないことを大事にしている。机はできるだけ生徒同士が顔を向き合わせるコの字型に(54ページ下段写真)。生徒同士で学びを深めるスタイルを基本にし、「間違えても問題ない、お互いに助け合えばいい」と何度もくり返している。

2 読ませる英文、読みたい英文を用意し 英文の論理展開や語彙になじませる

独自の教材を使うとき、和田先生はまず自分が大量の英文を読み、選抜した良文を生徒に届けている。その上で、読みたくなる仕掛けを考え、英語の論理展開の基本をレクチャー。さらに、深い理解を求める問いを投げ、議論の活性化をはかる。

3 高校での体験にリンクした教材を用意し 体験の意義を深め、英語を使う意欲も高める

高校での体験がより濃密になるよう、和田先生は行事の前後などに授業でもリンクした活動を行う。体育祭や文化祭のあとに、発見した級友の良さを本人に伝える英語の手紙を書く、海外に修学旅行に行く約2カ月前から、ホストファミリーに英語で何を話すか考える時間を毎授業取る、といったように。

4 生徒の心境の変化に合わせた活動で 生徒の成長を促し、英語を使う意欲も高める

1年生や2年生の春は、このクラスでうまくやっていたか不安な時期。お互いがつながり合う英語の活動を大事にする。2年生も後半になると、卒業後の進路を意識し出す。そこでこの世界や自分にできることを考える英語の活動も増やす。そうやって生徒が自分の成長のために英語を使っていく。

教師としての挫折 すべてを賭けた次の1年

「英文をたくさん読むことね」と助言してくれた。この「読む」を「音読」と勘違いした和田先生は、1節ほどの英文を1週間ですらすら言えるレベルまで音読する学習を繰り返した。音読できる英文とその内容が頭に蓄積されるほど、リスニングや長文読解、英作文問題で「あの文を使って考えたらどうか」と応用が利くようになり、半年後には模試の偏差値が70を超えたという。独自の学習方法の基礎が確立された体験だった。

大学と大学院では、テコンドーと英文学研究に励んだ和田先生だったが、高校の非常勤講師を「自宅近くで条件もよかった」ので引き受けたのを機に、目指す道が一変する。生徒に思いのほか喜ばれ、



じゃんけん大会の結果、英語で意見を述べるようになった生徒。堂々としていたが英語は不得意だそう。「でもこのクラスのみんなは間違えても笑わないから」と本人談。



ゲーム性のあるワークも多く、生徒がガッツポーズや叫び声をあげる姿をよく見せる、というのも和田先生の授業の特徴。

「誰かの役に立ってるのっていいな、と。そこで初めて教師を志したんです」

そうして正規教員となり、意気揚々と勤め出したのが順天中学・高校だった。だが、すぐに挫折を味わうことになる。当時の学校には勉強嫌いの生徒が少なからずいたが、和田先生のクラスではそうした生徒たちが自主退学してしまっただのだ。また、担任したときは素行の悪かった女子生徒が、2年生になって選抜クラスに移ると、見違えるように真面目に勉強しはじめたのも目の当たりにする。

「僕はその生徒たちの学ぶ権利を守ってやれなかったわけです。それからは、胃は痛いし、学校には行きたくないし、辞めたいとばかり思っていました。でも、あと1年だけ本気でやってみよう、それでダメだったら辞めようと思ったんです」

校外の研修にどんどん参加し、1年間で約350の授業を見学。校内でも同僚と授業研究を重ねた。そこで得たことを授業に生かすうちに、「しっかりと学び合うことができる」と、人は優しくなるんだ」ということを生徒たちから教わった。自分の軸となる教育の理念が定まった。

生徒はこう変わる

周囲との関係が深まり
受験以上に進路を見ずえる

授業で関わり合いを深めてきた生徒たちは、次第に日常でも「お互いに支え合い、高め合う関係」を志向し出すという。和田先生以外の授業でも、先生からの投げかけに即応し、意見を出し合い、生徒同士で助け合うといったように。入学当初は癖が強く多くの先生から心配されていた生徒が、3年生になるころには先生たちのほうから「あの子と話すのが楽しい」と言われるほど親しまれるようになったこともあった。「この学校は第一志望じゃなかった」という生徒は語る。

間違っても大丈夫。伝え合いながら
みんなで一緒に課題をやるのが楽しい。

— 英語でのやり取りは入学当初からできていましたか？
「最初は先生が何を言っているのか、わからなかったです」
「でも何回かやっていくうちに、聞くのも話すのも当たり前になってきて、そんなに緊張しなくなりました」
「最初は手をあげることも抵抗あったんですけど、みんなが手をあげるから、自分もつられて、という感じで」
「間違えても、あたたかい雰囲気だから、大丈夫なんです」

— 和田先生の授業のどんなところが面白いですか？
「いろいろなネタを言ってくれるから、すごく興味が湧きます」
「今日のピンポイントクの他にも『もし～なら』と空想の話や伝言ゲームもあって、そういうのが面白いです」

— 日本語でも難しいような課題が多いのに、楽しいのですか？
「一人ではなく、みんなで一緒に同じ課題をやる感じなんです」

— 英語は得意でしたか？
「苦手でした。今も英語が完全に得意とは言えないですけど、コミュニケーションを取る能力はあがったように思います」



1年7組の皆さん

「先生と出会えたから、このクラスのみならず出会えなかったら、ここで良かったと思えるし、かけがえのないモノができた」
3年生の生徒の場合、夏以降に「受験の相談が減る」という変化もある。偏差値を踏まえての大学選びといった相談は影を潜め、「この国際問題を勉強したいんですが」「経済支援をやりたい」といった、まさに「進路の相談が増える」のだ。

3年間、和田先生から英語を学んだあの生徒は次のような感想を寄せている。
「『勉強』を超えて生きていくうえで大事なことを教えてもらった気がします。授業が残り少なくなってきた頃、先生が言った『無知は人を傷つける。だから僕は、学ばなくてはならない』という言葉は、今まで生きてきたなかで聞いたどんな言葉よりも心にグサツときた言葉でした。

(中略)先生に出会ってなかったら今ほど英語ができるようになっていなかっただろうし、何より『世界を変えてみたい』という思いも抱けなかった」

生徒とともに教師も成長
一緒にベストを尽くしていく

今年の9月より、和田先生は、英語教育の知見を深めるために、1年間、ロンドン大学に留学する。現地では、国際評価の高いケンブリッジ大学の英語教授法資格のトレーニングも受ける予定だ。体系的な指導方法や評価方法を学び、授業の質を高める教材開発にも挑み、ゆくゆくは教員の資質を引き出す「プロのTeacher Trainer」の領域を日本に確立したいという夢があるからだ。

「これからの教師には、生徒と人をつなぎ、生徒と世界をつなぐ『ネクスター』の役割が求められると思っています。そのメソッドを自分なりに体系化し、他の先生方にも伝えられるようになります」
1年間の留学のことは、生徒たちにも夏休みに入る前に伝えた。すると数日後、和田先生は期せずしてある1年生から英語で書かれた手紙をもらったという。
その手紙の最後は、生徒のこんな想いとメッセージで締めくくられていた。
“I want to speak English better.
So, I'll keep studying English while you are away. Let's do our best together!
I'm looking forward to seeing you cheerfully next year.”

思い描いている授業のあり方

目指す生徒像

- 物事を知ることで、他者に寄り添える幅を広げ、世界の課題に自分事できり組む優しい人になる
- 英語をはじめとするさまざまな表現手段で人と関わり、つながることを楽しんでいける
- さまざまな人の考え方や価値観、さまざまなチャレンジを、受容することができる

実社会にあるものとの連動

過去の入試問題の長文読解などを通して、「世界のためにできる多様なアプローチの手法」を学ぶ

過去の入試問題の長文読解などを通して、「世界のさまざまな課題」を学ぶ

英語の授業

世界とつながる

・ 英文を読み、英語で話し合うことで、世界の課題やそのためにできることを知る

人とつながる

・ 助け合う英語学習や、英語での意見交換を通して、人とつながり合うことを楽しむ

基礎力をつける

・ 毎授業、英語で自分の想いを同級生に語る
・ 英文の論理展開の基本型を理解する

他の教育活動との連携

文化祭や旅行など学校行事とリンクしたワークを英語の授業で行い、生徒の人間関係や旅先の出会いをより濃密にする

クラスのHR活動も英語の授業と同じく生徒が意見を出し合い、協力して進める